

6. 体験学習プログラム ～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、本学教員が企画・引率する1プログラムと、NPO・NGO 団体が実施する海外のスタディツアーの中から学生にとって学びの多い3プログラムを選定し、企画しました。しかしながら、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、春季プログラム2プログラム（アメリカ、インド）を直前に中止することとなりました。教員、団体、旅行会社の各方面から多くの協力を得て準備をすすめてきており、参加予定の学生もおおむね半年をかけて渡航準備をしていただけに非常に残念な結果となりました。

国内プログラムでは、地域のさまざまな課題に目を向け視野を広げることのできる内容で、本学の専任教員が企画・引率するものを1プログラム、センターのボランティアコーディネーターが地域の団体と協力して企画するものを1プログラム実施しました。

全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、報告会を通じてプログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深める機会とするだけでなく、報告を聞きにきた学生が、次回プログラムへの参加を考えるきっかけにもなっています。

	プログラム企画者・団体	行 先	テーマ	実施日時・期間	人数
国内	社会学部 教授 筒井のり子	福島県福島市、 南相馬市、本宮市、 郡山市	福島スタディツアー ～福島「今」を見、福島を 生きる人々の「言葉」を聴き、 そして「自分」を見つめる～	2020年 2月16日(日)～ 2月20日(木) 5日間	14名
	ボランティア・NPO 活動 センター	滋賀県近江八幡市、 甲賀市	近江八幡スタディツアー ～ボーダレスなまちづくり～	2020年 2月25日(火)～ 2月28日(金) 4日間	14名
海外	ツナミクラフト	タイ王国	インド洋大津波からの復興 タイ験	2019年 8月30日(金)～ 9月7日(土) 9日間	3名
	NPO 法人 環境保全ネット ワーク京都	台湾	台湾の自然・文化体験エコ ツアー	2020年 2月22日(土)～ 2月27日(木) 6日間	4名
	社会学部 准教授 坂本清彦	アメリカポートランド	全米一住みたいまちポート ランドの持続的なまちづく り	2020年 3月1日(日)～ 3月8日(日) 8日間 (新型コロナウイルス の影響により中止)	6名
	NPO 法人 アーシャ＝アジ アの農民と歩む会	インド共和国	インドで学ぶ SDGs～インド 農村の持続可能な取組み～	2020年 3月1日(日)～ 3月10日(火) 10日間 (新型コロナウイルス の影響により中止)	4名

○国内体験学習プログラム／福島県【春季】

■参加学生	
野中 美希（政策学部 政策学科 4年次生）	河合 政明（文学部 仏教学科 3年次生）
朝倉 勇人（社会学部 現代福祉学科 3年次生）	大橋 寛海（社会学部 現代福祉学科 3年次生）
村上 大樹（文学部 哲学科 2年次生）	阿部 更紗（経済学部 現代経済学科 2年次生）
今井 杏（経済学部 国際経済学科 2年次生）	西垣 柚依（経済学部 国際経済学科 2年次生）
濱田 葵（文学部 臨床心理学科 1年次生）	早川 歩伽（文学部 臨床心理学科 1年次生）
石井 翔大（法学部 法律学科 1年次生）	朝野 健太（社会学部 現代福祉学科 1年次生）
稲岡 和穂（農学部 食品栄養学科 1年次生）	岸野 洋祐（農学部 食料農業システム学科 1年次生）
■テーマ、企画・引率教員	
福島スタディツアー ～福島「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～ 社会学部教授 筒井 のり子	
■協力団体	
阿部農園、NPO 法人 うつくしまブランチ、社会福祉法人 南相馬市社会福祉協議会 NPO 法人 デイさぼーとぴーなっつ、株式会社 小高ワーカーズベース ふたばいんふお 他	

■行程 2020年2月16日(日)～2月20日(木) 5日間			
日 程	時 間	活 動	場所／ゲスト
2月16日(日)	8:00	京都駅八条口出発	ホテル京阪京都グランデ前に集合
	18:30	福島市着	ユースゲストハウス ATOMA・泊
	19:00	夕食&ゲストからの話	NPO 法人うつくしまブランチ
2月17日(月)	8:30	宿発	
	8:50	阿部農園訪問	阿部農園の梨畑
	9:40	福島市発、浪江町へ移動	
	11:40	浪江町着・昼食休憩	なみ・まち・まるしえ等
	13:00	浪江町内を視察	小林 奈央子さん
	15:10	東京電力廃炉資料館の見学	
	15:50	ふたばいんふおを訪問	
	17:40	宿着・ふりかえり	農家民泊 いちばん星
	19:00	夕食	
2月18日(火)	8:20	南相馬市内の視察	いちばん星の星さんの案内
	10:00	デイさぼーと ぴーなっつ青田由幸さんのお話	市民情報交流センター・中会議室 (原町駅前図書館に併設)
	12:00	昼食休憩(お弁当あり)	同センター・クラフトルーム
	13:00	高橋 美加子さんのお話	同センター・中会議
	14:10	お土産買う時間	道の駅南相馬
	14:30	小高区周辺を自由散策	
	15:00	小高ワーカーズベース和田智行さんの話	小高バイオニアヴィレッジ
	17:00	宿着・ふりかえり	
	19:00	夕食	
2月19日(水)	9:00	南相馬市観光協会のボランティアの方と合流	
	9:00	南相馬市内の見学	
	11:00	南相馬市社会福祉協議会に訪問	
	15:30	郡山温泉へ出発	国道6号線を南下し、郡山へ
	18:30	郡山温泉着	郡山温泉
	18:40	夕食	
	19:30	入浴・休憩	
	21:00	郡山温泉発	車中泊
2月20日(木)	8:00	京都駅八条口着	
	8:15	深草キャンパス着	

野中 美希

(政策学部 政策学科 4年次生)

福島を訪れて、まだ終わっていないということ強く感じた。震災を伝えよう、街をよりよく変えていこうとされている方々の想いを知ることができた。街には帰還困難区域として柵で閉ざされてしまった震災当時から変わらない様子や、山積みになったフレコンバッグ、放射線測定器があった。何気ない会話にも震災の話題がでて、心の面でも消えることはない実感した。政治や経済の問題も絡み、人ごとではないと思った。

また課題からビジネスを創出するという取り組みで何事もポジティブに捉えて行動されていて、楽しいからこそ行動できると何うこともできた。

実際に見て聞くことでわかることがあり、無知は罪であるという言葉が響いた。情報に溢れ、それぞれ守るものが違う中で、様々な意見や知識を知り、客観的に物事を捉え長期的に見て考える力が必要だと感じた。今後震災からさらに時が経ち、知らない世代も増える中で伝えるのは私たちの使命だと考える。



宿舎での夜ご飯。たくさんの品数で味付けも素材も毎食美味しかった

河合 政明

(文学部 仏教学科 3年次生)

参加の目的は今の福島を見て、学び、それを伝えることです。

4日間で多くの方々と話し合うことができ、私にとって今後の考え方が変わったきっかけにもなりました。除染された土が入ったフレコンバッグが町からなくなり、町に人が戻ってからは「復興した」と言いたいと思います。そのためには、日本全体での協力が必要ではないでしょうか。IT 社会が到来すると言われていますが、人間でしかできないことも残されています。私達が伝えることがより多くの人々の心に伝わることを願います。



南相馬市防災センターで当時の話を聴く様子

朝倉 勇人

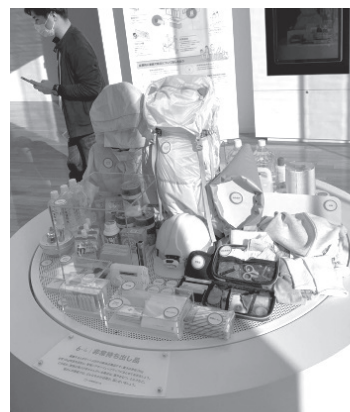
(社会学部 現代福祉学科 3年次生)

福島県を訪れて、津波による被害に加えて原子力発電所（以下、原発）の事故の影響が大きいと感じた。町中にあるフレコンバッグ、また居住できない原発近辺の地区をバスで通った時に、当時の生活の雰囲気を感じる家や建物がそのまま残っており時が止まっていた。

この福島スタディツアーで、震災によって失ったものやそこから未来に向かっての取り組みを、震災を経験した様々な立場の方から話を聴くことを通して、自分がどのように生きるかについて深く考えるきっかけになった。

今回で3度目の参加だが、町の景色に慣れてしまったことが怖いと感じた。

震災から約9年経ったが、オリンピックや万博等によって復興がおろそかにされている部分も感じた。インフラの整備を進めるだけが復興とは呼べないと思う。原発のことや災害について同じ日本に住んでいる私たち自身が今一度震災について知ることが必要であり、なによりも実際に現地を訪れて感じてほしいと思う。



消防署の2階に非常持ち出し品を展示していた。ここまで準備が必要だと初めて知った

大橋 寛海

(社会学部 現代福祉学科 3年次生)

今回のスタディツアーで3回目となる福島への訪問。複数回福島に来ていからこそ分かるようないい意味での変化や福島の魅力ももっと見つけたい、というテーマで参加した。



阿部農園から今年ようやく運び出されるフレコンバッグの作業の様子

今年参加して一番良かったと思ったことは阿部農園でずっと放置されていたフレコンバッグの山が遂に運び出されたということである。掘り起こされた場所には山砂が入られるということで一概によかったとは言えないのかもしれないが、運び出される様子を見ることができて安心した。

福島を訪問して毎回思うのは、お話ししてくださる方々は本当に福島が好きなのだということである。

我々は勉強をしに行っているので震災のことを聞くのは当然ではあるものの、福島を被災地としてしかとらえないのも間違いであると感じている。福島を被災地ではなく観光地として“スタディ”関係なしに旅行に行きたいと今回の参加で強く思った。これからも福島に関わり続けることを大切にしていきたいと思う。

村上 大樹

(文学部 哲学科 2年次生)

今回スタディツアーに参加し、震災からの復興の現状や福島で暮らす人々の思いなど、これまで報道等で見聞きしていた以外のことを多く学んだ。

バリケードを張られ一歩先は立ち入り禁止となっている区域や、汚染土をいれたフレコンバッグが当たり前のように残っている現状を目の当たりにし、復興はまだまだ先の見えないものであると感じた。一方で、震災から9年の月日を経て、人々の生活が改善された部分や福島で暮らす人々の温かさ、新鮮でおいしい魚介類など、ポジティブな一面に触れることもできた。こうした経験を経て私にできることは、今まで以上に復興への取り組みやそこに住む人々について知り、発信していくことではないかと思う。ありのままの福島の様子を多くの人に知ってもらい、関心を持ってもらうことが福島から離れた地にいる私にとって、復興のためにできるこ

とであると考えた。これからも福島、震災に関心を持ってできることを考えていきたい。



大平山から海岸沿いを見た風景

阿部 更紗

(経済学部 現代経済学科 2年次生)

私が福島スタディツアーに参加した理由は、震災を風化させないための一員になりたいという気持ちと、今後また災害が起きたときに少しでも役に立ちたいと思ったからです。

1番記憶に残っているのは、バスで帰還困難区域を走っている間に見た景色です。道路脇には真っ黒なフレコンバッグが積み、全ての道が「帰還困難区域」と書かれた看板とバリケードで封鎖されていました。放置されたままの家々には生活のあとがそのまま残っていました。メディアでは、まるで大部分で復興が着実に進んでいるかのような報道もなされますが、人が戻れない町、山積みのフレコンバッグ、枯れ草だらけの海岸などの景色を見て、私は東北が復興しているとは思いませんでした。

今回のツアーで、「現地に足を運び、自分の目で見て、話を聞くこと」の重要性を改めて感じました。ツアーを通して得たもの・感じたことを忘れず、これからも時間をかけて学びつけていきます。これまでの学生生活で1番、考えさせられ、心を動かされ、モヤモヤの消えない、自分にとって非常に意味のある体験になりました。



バリケードで封鎖された浪江町立津島小学校へ続く道

今井 杏

(経済学部 国際経済学科 2年次生)

私が、初めて福島県を訪れて考えたことは2つあります。

まず1つ目は、震災はまだ終わっていないということです。仮置き場に積まれているフレコンバッグや帰還困難区域の景色は震災当時からまるで時間が進んでいないように感じました。震災から9年たちましたが、まだ残されている課題が多くあることを学びました。

2つ目は無知の怖さです。原子力発電所が建設された背景など知り、ただ大きい震災が起こったから仕方が無いということでは済まされない問題であると思いました。私も選挙権を持つ一人としていつ加害者側になってもおかしくありません。ただメディアやSNSの情報を鵜呑みにするだけではなく、真実を理解しようとする姿勢が必要です。

福島県の復興が一日でも早く進むよう、実際に現地を訪れ感じたことを、身近な人々に伝えていきたいです。そして、同じような悲劇を生まないう務めることが残された私たちの使命ではないのでしょうか。



バスの中から見た、「震災を乗り越えて復興」の文字。力強いメッセージであった

西垣 柚依

(経済学部 国際経済学科 2年次生)

この福島スタディツアーにおいて、印象に残った場所がある。福島浪江町という津波をもろに受けた元港町である。町を一望できる大平山に登ると、時が進んでいると感じる漁港と、震災直後と錯覚するような荒れ地が一緒になっており、パラレルワールドに放り出された感覚になった。

このスタディツアーではいろんな場所に行き、いろんな立場の方の話を聞いた。同じ県の中でも住む地区によって、自身の立ち位置に

よって全く意見が違った。同じ場所でも時間軸が異なる、それぞれの意見に整合性が無い、という状況で、情報が整理できなかった。

しかし、被災者の方の話を聴く中で、スタディツアーで話してくれた方々は、自身の立場から感じた被害について、私達にヒントを伝えてくれたのではないだろうか。そう仮定し、この話はどのようなヒントになるのだろうかということを考えながら話を聴くことで、ただ話を



阿部農園に埋められていた汚染土

体験談として聴くのと違った視点で話を聴くことが出来た。

濱田 葵

(文学部 臨床心理学科 1年次生)

私は今回初めて福島に行くことが出来ました。このツアーを通して震災から9年経った今でも知られていないことが多くあることを実感しました。4日間で様々な立場の方からお話を聴くことができ、福島の震災当時の状況や現状を知って、今まで同じ日本で起きていた事について、大切な事を何も知らずに過ごしていた事に気付きました。

私が特に考えさせられたことは、復興という言葉についてです。通る道路のすぐ側には、除染で出た土を詰め込んだフレコンバッグがたくさん並んでいたり、放射線量を測る測定器が所々に置かれていたり、それらが無くならないと復興が終わることにはならないのかなと思い



小高区に行った際に見かけた駅の前に置かれている放射線量を測る測定器

ました。しかし、フレコンバッグの処理がいつ終わるのかは決まっていない現状と原発の中でも作業が行われている状況の中でも、港町や町の所々では復興が少

しずつ進んでいて、これからどのように変わっていくのか自分の目で見て感じていきたいと思いました。

実際に福島に行く事でしか感じられない、自分の目で見た国道6号線からの光景や浪江町の海の景色など、初めて知った事故の詳細、福島の現状、私が感じた福島の良いところなどを身近な人に伝えていけるようになりたいです。そして、自分自身の福島や震災・原発事故についての知識をもっと深めたいです。

早川 歩伽

(文学部 臨床心理学科 1年次生)

私がこのツアーに参加したのは、被災地の今を自分自身の目で見て、現地の方々の生の声を聞きたいと考えたからである。初めて訪れた福島県では、9年たった今でも震災の爪痕が色濃く残っていた。

津波の被害をうけた地域を目の前にした時はどこまでも広い田畑が広がる光景に言葉を失った。福島県は地震、津波の被害だけでなく原発による影響も受け、まだ今も帰還困難区域がある。様々な場所で目にした汚染土を入れた土のう袋はその数に恐怖すら感じた。

今回私が目にした被災地は至る所で様々な工事が行われており、復興に向かって進んでいると感じられたが、その一方でまだまだ沢山の課題がある。このツアーでは沢山の被災者の方々から貴重なお話をお聴きし、自分の無知さを痛



津波の被害を受けた福島県南相馬市鹿島地区

感した。このツアーを通して、私がこれからできることは聴いたこと、見たこと、学んだことを自分の周囲の人々に伝えるということであると考える。

石井 翔大

(法学部 法律学科 1年次生)

私が今回の福島スタディツアーで印象に残っていることは3つある。

1つ目はうつくしまブランチの渡辺氏が言っ



NPO 法人うつくしまブランチさんに震災当時についてのお話をしてもらっている

ていた「無知は罪である」ということだ。渡辺氏は震災当時福島市に住んでいたが、避難しなかったそう。しかし当時、今の知識があれば必ず逃げていたと強く感じていた。自分も災

害が起きた時に情報不足で後悔しないようにいろんな情報に目を向けようと感じさせてくれた。

2つ目はデイさぼーとぴーなっつの青田氏のお話だ。その中で「てんでんこ」という言葉が出てきた。その言葉を私の理解している意味と違う意味として青田氏は理解していた。このことに気づき、自分の知っている情報が全て正確であるとは限らないということを感じることができた。

3つ目は小高ワーカーズベースの和田氏のお話だ。課題が山積みしていることを課題解決ビジネスや研究のネタが豊富と捉えていらっしやう。このように自分の頭を柔らかくしてくれる例を挙げてくれて、自分の考えに固執しすぎるのもよくないなと思えた瞬間だった。

この福島スタディツアーで学んだことを意識して日々の活動に生かしていこうと強く感じた。

朝野 健太

(社会学部 現代福祉学科 1年次生)

今回福島スタディツアーに参加して、現地の方の様々な思いを知ることができた。

私は話を聞く中で「復興とは何か」について改めて考えた。原発事故によって避難していた人が地元に戻ってくることができれば復興なのか、倒壊した建物が再建されたら復興となるのか、人によって復興の定義は違ってくると思う。そんな中で思い思いの復興に向かって進んでいく姿を知り、福島の人々の強さを学んだ。

県内をバスで移動していると汚染された土砂

が入っている黒いフレコンバッグという袋が山のように積み重なっている場所が多く見られた。山積みになりどこで最終処分をするのかも決まっておらず、ただ置かれているだけだった。私にはあの黒い袋が人々を寄せつけず、苦しめているようにも見えた。

このスタディツアーからは学ぶことや考えさせられることが多かったので、ぜひ来年も参加して前年との比較、被災者の心境の変化などを知りたいと感じた。



震災当時のままの請戸小学校。体育館の床がへこむなど、震災の悲惨さを物語っている

稲岡 和穂

(農学部 食品栄養学科 1年次生)

ツアー前の福島イメージは、9年も経っているからそこまで震災の跡は残っていないだろうと思っていた。でも、実際はそうでなかった。建物ひとつない荒れ地には伸びきった雑草とフレコンバッグの山。道ですれ違うのは2台に1台がトラック等の工事用車両。半壊したままの建物。何の変哲もない建物の前に置かれた立ち入り禁止の柵。そんな場所があった。震災はまだ終わっていなかった。でも、新しい堤防や建物も建設されており、着実に復興していることも見て取れた。



ごく普通の建物の前に設置されている立ち入り禁止の柵

実際に目で見て肌で感じた福島は良い意味でも悪い意味でも想像とは全く違うものだった。映像で見るよりはるかに震災の恐ろしさを痛感した。それでも私の

中ではどこかまだ人ごとで自分は大丈夫だと思ってしまう部分もある。だからこそ、この経験を生かして知らないことに興味を持ち知っていく。そして、将来に役立てていきたい。今回福島の方々からたくさんのことを学び、とても良い経験になったと思う。

岸野 洋祐

(農学部 食料農業システム学科 1年次生)

街並みを見ると、国道6号線はきれいに整備されているものの、道路の脇には原発事故で汚染された土が入っているフレコンバッグといわれるものが大量に置かれ、それらを一時的に保存する中間貯蔵施設に向かうトラックや、被災したお店や住宅がその当時のまま放置されていた。本当に自分の住んでいる日本かどうか疑うもので、「ここには居たくない、早くここから立ち去りたい」という感情が沸いた。

南相馬市を視察する際にガイドさんから、黒いガードレールは津波で壊され建て替えられた表示と聞き、高台である場所も黒いガードレールになっているのを見て改めて恐ろしさを感じた。それと同時に、震災当時は1000年に1度の想定外の大災害であり、防災意識や危機管理能力が今ほどではなかったのは当たり前だが、今後30年以内に南海トラフ地震は起こるとされている今、3.11の教訓や一人一人が防災意識を持たなければならないと強く感じた。

そして、東京オリンピックや大阪万博の開催などもあり、東日本大震災は年々忘れ去られている。だからこそ、いい経験だったで終わらせるのではなく、多くの人に今回経験したことを伝えていきたいと思う。



津波に流され建て替えられた際にあえて黒色にしている

○国内体験学習プログラム／滋賀県近江八幡市【春季】

■参加学生	
村上 大樹（文学部 哲学科 2年次生）	土肥 亮太（社会学部 現代福祉学科 2年次生）
早田 有希（社会学部 現代福祉学科 2年次生）	妹尾 柚郁（農学部 植物生命科学科 2年次生）
渡中新太郎（農学部 植物生命科学科 2年次生）	佐藤瑛連菜（短期大学部 社会福祉学科 2年次生）
新谷 朱音（文学部 日本語日本文学科 1年次生）	木村 洸太（理工学部 環境ソリューション工学科 1年次生）
早藤 涼花（社会学部 社会学科 1年次生）	安原 拓真（社会学部 社会学科 1年次生）
喜多 優貴（農学部 植物生命科学科 1年次生）	熊谷 真由（農学部 植物生命科学科 1年次生）
牛山 雅結（農学部 資源生物科学科 1年次生）	西山 佳佑（農学部 資源生物科学科 1年次生）
■テーマ 「近江八幡スタディツアー ～ボーダレスなまちづくり～」	
■協力団体 株式会社まっせ 社会福祉法人しみんふくし滋賀 社会福祉法人グロー まちや倶楽部 やまなみ工房 一般社団法人近江八幡観光物産協会 社会福祉法人近江八幡市社会福祉協議会 近江八幡市 他	

■行 程 2020年2月25日(火)～2月28日(金) 4日間			
日	時 間	活動内容	場 所
2月25日 (火)	8:00	JR 京都駅八条口出発	JR 京都駅八条口アバンティ前
	9:30	近江八幡市着 宿泊場所へ荷物預ける	MACHIYA INN
	10:00	観光ボランティアガイドの案内によるまち歩き	白雲館集合
	12:00	昼食・休憩	しみんふくし滋賀（野間邸）
	13:00	近江八幡市のまちづくりについてのレクチャーと意見交換会	まちや倶楽部
	17:00	宿泊先での諸注意など・休憩	
	17:45	夕食・食堂やボネシア店主からの話	食堂やボネシア
	19:00	一日のふりかえり	MACHIYA INN
2月26日 (水)	7:30	朝食・ミーティング	MACHIYA INN
	8:30	グループまち歩き	
	10:00	ボーダレスアートミュージアム NO-MA 見学と説明	ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
	11:00	社会福祉法人グローや NO-MA の取り組みについてレクチャー	まちや倶楽部
	12:00	昼食・休憩	
	13:00	しみんふくし滋賀とおやじ連の取り組みについてレクチャー	しみんふくし滋賀（野間邸）
	15:30	八幡堀めぐり	八幡堀
	18:00	夕食	食堂やボネシア
2月27日 (木)	19:00	一日のふりかえり	MACHIYA INN
	7:30	朝食・ミーティング	MACHIYA INN
	9:00	左義長製作現場見学、祭りの話、製作体験など	白雲館集合
	12:00	昼食・休憩	まちや倶楽部
	13:30	「ほんがら」上映会と意見交換会	島町コミュニティセンター
	16:30	宿泊先へ移動	バス
	17:00	宿泊先 着	MACHIYA INN
	18:00	夕食	食堂やボネシア
2月28日 (金)	19:00	一日のふりかえり	MACHIYA INN
	7:30	朝食・ミーティング	MACHIYA INN
	8:30	宿泊先出発	バス
	9:00	ラ コリーナ視察・たねやの SDGs の取り組みについての話	ラ コリーナ
	11:00	やまなみ工房へ移動	やまなみ工房
	12:00	昼食（試食）・休憩	
	13:30	やまなみ工房視察	
	15:00	ふりかえり 終了後、やまなみ工房出発	
	17:30	京都駅八条口着・解散	JR 京都駅八条口周辺

村上 大樹

(文学部 哲学科 2年次生)

私は、今回の近江八幡スタディツアーで多くの方と交流、意見交換を行い、近江八幡の町並みの中で活動する中で、ボーダレスとは何かということについて考えることが出来たと思う。その中で、障がいの有無や性別といったボーダーに限らず、世代間や国籍、伝統文化など様々なところにボーダーは存在しているという事を感じた。こうしたボーダーを取り除き、ボーダレスなまちづくりを実現するために、行政や、社会福祉協議会、民間など様々な立場の方が活動を行っている事も学んだ。ボーダレスなまちづくりに私たちが出来ることは、まちづくりへの取り組みを知ること、そして、学生の立場として、自分の専門領域での学びを活かしてボーダレスへの取り組みを考えることである。私は教育を学んでいるので、学校教育や地域学習などで、どのようにボーダレスを実現させていくことが出来るか、今回の経験を踏まえて考えていきたい。



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA で作品を鑑賞する様子

土肥 亮太

(社会学部 現代福祉学科 2年次生)

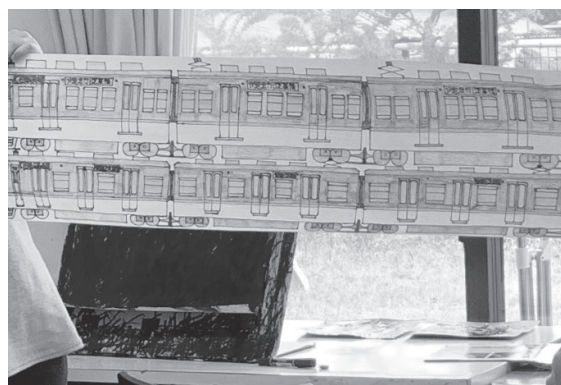
今回、「ボーダレスなまちとは何か」と考えてみて、大きく2つの意味が見出せました。

1つ目は「文化や景観等を含めて誰からも愛されるまち」です。これを感じたのには、左義長まつり保存会の方の「外部の人の力を得る為に、外部にも情報を発信している」というお話があります。ここから「多くの人が伝統文化を愛し、守っていく為の努力をしている」という事を感じました。

2つ目は「住民各々が、自由に生活できるま

ち」です。やまなみ工場の職員の方の「この人は何をしているのが楽しいのか、というのを探る事を心掛けています」という言葉が印象に残っています。このような事等から「ボーダレスなまちには、住民の自由な暮らしも必要である」と感じました。

ボーダレスなまちづくりの背景に、様々なボーダーが多様な形で絡んでいる事や住民のニーズを尊重する事の必要性を学びました。完全にボーダレスにしていくことは難しいかもしれませんが、地域等の活動に積極的に参加し、誰もが暮らしやすいまちづくりに少しずつ貢献していきたいです。



やまなみ工場の利用者が描いた電車の絵。広げるとかなりの長さとなる

早田 有希

(社会学部 現代福祉学科 2年次生)

私は今までボーダレスについて深く考えることはなかった。今回参加して、1番良かったと思うことは一緒に参加しているメンバーの意見を聞くことで、自分の学びにつなげることができたことである。具体的には「ボーダレスは自分の居場所があるかどうか」という意見である。この意見は自分では思いつかなかったが、すんなりと自分の中に入ってきた。ここが自分の居場所だと実感できれば、ボーダーに感じることはないと考えたからだ。私にとっての居場所は家族や学校、気の合う友達などが挙げられる。つまり、居場所といってもただ単に場所を指すのではなく、人とのつながりも関わってくるのではないかと考えた。例えば、車椅子を利用する方にとって、道がきれいに整備されておらず移動しづらい場合でも、近くに手伝う人がいればボーダーに感じることはなく、ボーダレスといえると考えたからだ。改めて学びの深いプログラムであったと感じる。



一見通りやすくなった道でも、見方を変えることが大切

妹尾 柚郁

(農学部 植物生命科学科 2年次生)

何に関しても便利なことは良いことではあるが、ただ便利で快適にするだけではより良い町づくりとは言えないということを学んだ。子供や高齢者が使いやすいように段差を少なくし、車椅子に乗った人の為にスロープやエレベーターを整備することはもちろん大切だ。しかし、歴史的景観が長所の町において、その行き届いた便利は時にデメリットになる可能性がある。その町が何を残していきたいのか等をしっかりと把握した上で町づくりをしなくては行けない。便利さと不便さの塩梅が重要なのだ。障がいがあるからといってバリアフリーに改装された町家を訪れても歴史を感じられないという意見もあるようだ。だれでもその地域の歴史や本来の空気感に触れられるよう、あえて昔ながらの不便さを残すというのもボーダレスなのだとわたしは思う。それには周りの人のサポートが必要不可欠で、その環境をみんなで協力して整えることが町づくりに繋がるのだろう。



便利に改装されつつも町家の趣を残した宿泊施設

渡中 新太郎

(農学部 植物生命科学科 2年次生)

この春季体験学習プログラムに参加して出会った近江八幡の人達は、左義長祭りの準備や

自分達の仕事を楽しんでいるように感じた。実際に、左義長祭りの準備をされていた方は、「楽しくなければ続いていない」と話されていた。ラ コリーナ近江八幡で働いている方も「働いている感覚がなく、好きなことをやっていて給料を貰えるのが正直、変な感覚がある」と話されていたのが印象的だった。この楽しさが、近江八幡の伝統や町並みが守られ、発展していく源であり、困難に直面しても乗り越えていく力であると思った。

まちづくりには楽しさが必要であるように感じる。障がい者や外国人、移住してきた人にとっては、地域の人と交流が生まれることで、ボーダレスなまちになっていくのだと思う。そのきっかけが祭りやボランティアなど楽しいと思える活動や行事なのかもしれない。今回のプログラムで自分の中に新しい価値観や考え方が加わり、多くの学びを得ることができた。



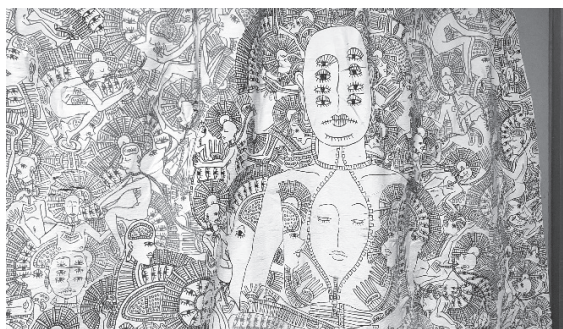
左義長祭りのダシの材料は、ほとんどが穀物などの食べられるものが使われる

佐藤 瑛連菜

(短期大学部 社会福祉学科 2年次生)

国内体験学習プログラムに参加することで、近江八幡市の町の歴史や町に関わる方の声を聴き、近江八幡市のまちづくりについて知ることができた。近江八幡市を代表する左義長祭りは多世代の方が関わる祭りであり、実際に左義長祭りの左義長のダシを製作している方に話を聞き、祭りの歴史や祭りへの思いを知った。私は祭りとは縁のない環境で育ったため、近江八幡市の町民が祭りに懸ける思いに驚いたが、若い世代に祭りを繋げていく思いは、同時に伝統的な文化を残すことに繋がることを知った。次に印象に残った体験はやまなみ工房の見学である。この法人は、障がいの重さに関係なく、それぞれの障がいや個人に必要な配慮を行い利用者を受け入れている。こうした施設が増えることで障がい者やその家族が安心して暮らすこと

ができる。また、障がい者と共生して暮らすまちづくりができるのではないかと感じた。今回のプログラムを通して、ボーダレスなまちづくりは、様々な世代の方が生活しやすい環境を整えていくことだと感じた。



やまなみ工房の利用者さんの作品。とても大きい

新谷 朱音

(文学部 日本語日本文学科 1年次生)

まちづくりに興味があったので、体験学習プログラムに参加することにした。プログラムのテーマであるボーダレスについて、はじめは深く考えていなかったが、プログラムを通して考え、終えるころには、考えが一転した。

近江八幡市は、かつて城下町や商人の町であった歴史を感じる景観が残されていた。昔ながらのまちなみを残すのと同時に、その土地に住む人が暮らせるように、どのように残して、保存するかは難しい問題である。まちづくりや地域活性に携わる団体には、それぞれが得意とする分野がある。しかし、大きなことを行おうとすると様々な団体との協力が必要になる。そのために、立場や必要とすることが異なることを理解し、心配りをして、話し合うことが大切だと教えてもらった。

個人として向き合い、心配りや対話などのちょっとしたことから、ボーダレスは実現できるということである。そして、心配りや対話は、人と関わるどんな時でも必要なことだ。



明治期の和洋折衷の建築「旧近江八幡郵便局」

木村 洸太

(理工学部 環境ソリューション工学科 1年次生)

今回のスタディツアーは自分にとってとても新鮮で刺激的な体験になりました。まず印象的だったのは街並みでした。街を歩いてみるとただ町家が並んでいるようですが、中にはお店を営んでいたり、ミュージアムがあったりと様々な姿をもった町家がたくさん見つかりました。外見は昔ながらの町屋、しかし中は今どきのおしゃれなお店が広がっています。町家を有効活用したりリノベーションにより古きものと現代風のものとうまく調和されていて町全体に一体感を感じました。また、色々な団体の方から話を聞きましたが、その全員が街を大切に思っていると感じました。そういった気持ちがボーダレスなまちづくりに大前提として必要であり、近江八幡市にある伝統的な街並みを残し続けることができている秘訣だと痛感しました。これからはそのことを頭に残しつつ、地元で街並み保存だけでなく、ボーダレスな社会のために自分にできることがないか模索し実行していこうと思います。



映画「ほんがら」鑑賞後、実際に祭に関わっておられる方と意見交換の様子

早藤 涼花

(社会学部 社会学科 1年次生)

私はこのスタディツアーに参加して、近江八幡には「地元愛」が溢れていると思った。そう思った理由は2つある。1つ目は地域の風景や人々を大切にしながら発展させようという近江八幡の人々の意識である。今も近江八幡には江戸時代に建築された建物が多く残っている。そんな街並みを残すべく、町に合ったお店を誘致したり、空き家を地域の人の憩いの場にしたりと様々な取り組みを行っている。2つ目は町の文化継承のためにボランティアがドブ川であった堀を復活させたことだ。かつて水路であった

八幡堀は、高度経済成長期にドブ川になってしまった。そんな堀を一時は埋め立ててしまおうという案もでたが、「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」と主張しボランティアでドブさらいを行い、埋め立て案を撤回させた結果、今の美しい八幡堀がある。

効率化や機械化の波にのまれることなく、近江八幡では自分の町の特色を生かす取り組みをしている。私も自分の町の特色を知りたいと思った。



今も地域の人に愛される八幡堀

安原 拓真

(社会学部 社会学科 1年次生)

まちづくりの様々なあり方について勉強したいと思い、近江八幡の体験学習プログラムに参加した。近江八幡市の街の現状や取り組みについて知ることができた3泊4日だった。今回、参加して、普段あまり接点のない様々な年齢層や立場の方とコミュニケーションをとる機会が得られた。みなさん熱心に話してくださり、私たちの話もしっかりと受け止めてくださった。

体験学習プログラムと一緒に参加したメンバーにも刺激を貰った。毎日の振り返りの中で、見ている視点や角度、価値観の違いで、同じものを見たり聴いたりしても捉え方が異なるとい



株式会社まっせの田口氏との意見交換の様子

うことを実感した。それぞれに自分のフィールドを持っており、自分にはない考え方を知ることが出来た。自ら多様な年齢や立場の方と関わる機会を作り、コミュニケーションをとる中で、自分の視野を広げていけるようにしたい。また、このプログラムを通して得たことを内に秘めておくのではなく、積極的に発信したり活動に取り組んで行きたいと思う。

喜多 優貴

(農学部 植物生命科学科 1年次生)

近江八幡市は町家など昔ながらの建物が多く、風情ある景観が魅力的である。また、昔から続く祭がある。これらが地域市民の思いやつながりによって今も存続していることを、まちづくりにかかわる様々な団体の方から伺った。しかし、その担い手となる若者が減っている。地域活性化を計るには地元をはじめとした人と人とのつながりが大切であり、そのつながりがボーダレスなまちにつながっていくと考える。

また、スタディツアーに参加し、障がい者は介護や支援されるというだけでなく、表現者など主体的な一面もあるということに気が付いた。福祉は、マイナスを補うのではなく、一人の人間としての存在意義を高める手段となり、ボーダレスに繋がると考えた。ボーダレスとは何か、どういう状態なのかを一くくりににはできない。考え続ける必要がある。一人一人が意見をもって行動することによって、より深まっていくものだと気づいた。



近江八幡の地域活動について語るおやじ連の方たち

熊谷 真由

(農学部 植物生命科学科 1年次生)

4日間の活動を通して感じたことは、人々の居場所を作ろうとしていることである。特に、

おやじ連について説明を聞いた時に、話をしてくださった方が生き生きとしていたのが印象に残った。自分独りではなく、仲間と一緒に楽しく過ごすことによって生きがいを得ることができ、また、日常生活においても助け合いが生まれているのだと思った。祭りについては、少子高齢化によって伝統を受け継ぐ人が少なくなる中、地域や世代を越えたつながりを保っていくことの大切さを学んだ。地域の伝統を守るためにも、世代を問わずみんなが寄り集まることのできる居場所が必要であると思った。これらの居場所があることによって、住みやすい街に、そして、ボーダレスな街になっていくのだと感じた。

このプログラムに参加して学んだことを、自分たちの住んでいる地域と比較しながら、地域活性化のために生かしていきたい。



左義長祭に向けて作られるダシのねずみ

牛山 雅結

(農学部 資源生物科学科 1年次生)

2月後半に近江八幡市でボーダレスな町づくりをテーマに4日間学んだ。たくさんの意見や考察があり、学ぶことや考えることが多くあった。

今回のスタディツアーで特に印象に残った事は、地域での連携だと思う。近江八幡市では左義長祭りやほんがら松明といった地域の神事やおやじ連などの地域の人々のつながりが垣間見えた。私を含め若者は地域の人々とのつながりが希薄だと思う。近江八幡の方々の活動を通してのつながりが少しうらやましく感じた。ボーダレスな町づくりは難しいと私は思う。何をボーダーと捉えてボーダレスにしていけるか、対象は誰か、配慮はできているかなどを考えていく必要があると思う。しかし、何をしても誰かの力が必要であり、人と人とが手を取

り合って活動していくことがボーダレスの第一歩だと考える。



ラ コリーナ近江八幡の風景

西山 佳佑

(農学部 資源生物科学科 1年次生)

私は、近江八幡市での活動を通して、複数のことを学んだ。まずは、出身・性別・年齢を超えて祭りに関われる機会を増やし、幅広い人に祭りを知ってもらうことが、祭りなどの伝統を継承していくための一つの重要な要素となり得るということだ。また、より良い社会を構築していくためには、年齢・性別・障がいの有無関係なく一人一人と対等な人間として関わっていく必要があるということである。そしてSDGsの活動には、ごみの分別など私達ができることも多数あり、自分が関わるという意識を強く持つ必要があるということである。

4日間で、様々な視点でまちづくりを学び、多数の人からの意見を吸収することができた。今回の近江八幡での学びを活かし、大学での学びに繋げ、将来、社会や地域に貢献できるような人間になりたいと考えている。そして、祭りを愛し、地域のよりどころとされている近江八幡市の方々のように自分の故郷をもっと好きになりたい。



環境に配慮した SDGs の取り組みを推進している
ラ コリーナ近江八幡

○海外体験学習プログラム／タイ王国【夏季】

■参加学生	
森本 心（経営学部 経営学科 3年次生）	山中 梨帆（社会学部 社会学科 3年次生）
福島 麻斗（政策学部 政策学科 2年次生）	
■テーマ、企画団体	
「インド洋大津波からの復興タイ体験スタディツアー」 ツナミクラフト	

■行程 2019年8月30日（金）～9月7日（土） 9日間			
日 程	時 間	活動内容	場 所
8月30日（金）	9：30	関西空港集合	プーケット
	11：45	タイ国際航空 TG623関空11：45→バンコク国際空港15：45	
	16：45	乗り継ぎ TG217バンコク国際空港16：45→プーケット国際空港18：05	
	20：00	専用車にてホテル着 夕食時に旧プーケットタウンの街並み保全を見学 【ホテル泊】	
8月31日（土）	9：00	（タイ基本情報を学ぶ）専用車にて移動 ホテル出発	カオラック
	16：30	ホテルからタクシー移動 震災遺構、市場の訪問 夕食 【ホテル泊】	
9月1日（日）	11：00	（児童養護施設訪問）専用車にて移動 ホテル出発 児童養護施設 パンターンナムチャイ 到着	ナムケム村
	午後	津波避難所兼、ユースセンター 【ユースセンター泊】	
9月2日（月）	全日	（インド洋大津波、タイ最大の被災地ナムケム村滞在、アートによる復興）専用車にて移動 ナムケム村を巡る 漁港、メモリアルパーク、ミャンマー人施設 バンムアン町の旧避難所跡 さをり織り体験 昼食 タクアバ旧市街のアートプロジェクト見学、タクアバ特別支援学校訪問 パンターンナムチャイにて子ども達と交流会 【ユースセンター泊】	ナムケム村
9月3日（火）	全日	（ホームステイ1日目） ナムケム村出発→バンサンファン（児童養護施設） →アンダマンディスカバリーズ社訪問 タレーノーク村到着 アクティビティ① ろうけつ染め体験 【ホームステイ】	タレーノーク村
9月4日（水）	全日	（ホームステイ2日目） タレーノーク村でのアクティビティ② マングローブ探検、せっけん作り、おかし作り、屋根づくり イスラム衣装体験など。 【ホームステイ】	タレーノーク村
9月5日（木）	午前	（ホームステイ3日目） タレーノーク村でのアクティビティ③ マングローブ探検、せっけん作り、おかし作り、屋根づくり イスラム衣装体験など。	タレーノーク村
	午後	専用車にて出発→FED（ミャンマー人労働者の子ども達の通う学校を視察） 【ホテル泊】	
9月6日（金）	午前	（ふりかえり） 朝市見学、体験	プーケット
	午後	昼食後出発→マーケットで買い物→空港へ	
	19：00	TG218プーケット19：00→バンコク20：25 TG622バンコク23：59→関空7：30（翌日）	
9月7日（土）	7：30	関西空港着	
	8：30	解散	

森本 心

(経営学部 経営学科 3年次生)

私は、現地にて「人と人との協力」と「取り組むべきこと」について体感し学んだ。タイという国は、バカンスや観光地として世界中から人気のある国だ。スマトラ沖地震発生時には、世界各国の人々がタイに滞在しており被災した。だからこそ、世界各国から支援、協力があり、ここまで復興することができたのだと思う。

被災当初、現地の方々は心理的不安からも働くことを求めており、そこで導入されたのが「手仕事」だ。私たちは「ろうけつ染め」「絞り染め」「さをり織り」「屋根作り」「石鹸作り」などを体験したのだが、どのアクティビティも集中力が必要で、作業中は余計なことを考えられない。このことが重要であり、精神的リハビリに繋がった。

震災から15年の時を経て、現在、持続可能な支援として、教育や職業訓練、防災が重要視されている。津波で大きな被害を受けたにもかかわらず、力強く復興をなしとげているタイの小さなコミュニティを知ることで、これからの未来は自国だけでなく、他国にも目を向けて助け合って生きていかなければならないと感じた。



津波避難場所となる建物に併設されている幼稚園を訪問、視察、授業に参加させてもらった

山中 梨帆

(社会学部 社会学科 3年次生)

私がこのツアーに参加しようと思った理由は、津波被害の支援の在り方について学びたいと思ったからだ。

タイの方と交流している中で印象に残っていることが2つある。1つ目は昭和の日本にタイムスリップしたかのような感覚に陥ったことである。ホームステイした村は日常的に誰かの家で

団欒し、村全体が1つの家族のようだった。また、子どもたちの様子を見ても、外で学年関係なく、裸足で遊んでいる姿を見て、伝え聞いた古き良き日本の風景とはこういうものだったのだろうと感じた。

2つ目は支援の在り方について学んだことである。このツアーに参加し、私が今まで持っていた支援の概念が変わった。必要な物資を届けるだけでなく、被災者に寄り添う支援を継続し、被災者自身が自立できるようにサポートする支援を学んだ。日本でもこの考えをもっと取り入れて支援していくべきだろう。ここで得た経験を活かし、今後も支援の在り方について考えていきたい。また、心に響いたタイの方々の温かさを忘れず私も努力していきたい。



ホームステイ先のガイドさんとアンダマンディスカバリーズ社員ビーさんと海辺で撮った写真

福島 麻斗

(政策学部 政策学科 2年次生)



2004年のインド洋大津波によって大きな被害を受けたタイは被災後、迅速に復興がすすんでいる。海の近くに津波の避難所を作り、6か国語で津波の襲来を知らせる警報器の設置をするなど、タイ国民だけでなく外国人に対する防災も考えられていた。

今回訪れたタレーノーク村は、津波で人口の3分の1の人々が命を落とすなどの甚大な被害を受けたが、その後、村や学校を海から離れた場所や高台へ移転し、村人が主体となって地域づくりをすすめている。そこからは村人たちが主体となって津波被害に向き合うという強い意志を感じた。しかし15年たった今でも津波による課題が残っているのも事実である。津波被災者

の墓地には身元不明者の遺体が300体ほど冷凍保存された状態のままになっている。DNA 鑑定を行うことで違法労働でタイに入国していることが判明すればその家族が裁かれるという事情からどうすることもできない現状がある。今でも災害の爪痕が残っているという、つらい現実に胸がふさがった。

○海外体験学習プログラム／台湾【春季】

■参加学生	
村井 俊介(文学部 歴史学科 4年次生)	岩畑 広輝(社会学部 社会学科 2年次生)
中原 紘子(農学部 資源生物科学科 2年次生)	三戸呂優美(文学部 英語英米文学科 1年次生)
■テーマ、企画団体	
「台湾の自然・文化体験エコツアー」 NPO 法人環境保全ネットワーク京都	

■行程 2020年2月22日(土)～27日(木) 6日間			
日 程	時 間	活動内容	場 所
2月22日(土)	9:40	関西国際空港集合	高雄市
	11:40	中華航空 CI167にて関西空港発	
	14:25	高雄着	
	夕方	専用バスで移動 高雄 ハマセン 倉庫をリノベーションした駁二芸術特区見学 京華餐廳にて夕食(火鍋料理) 【ホテルヤム泊】	
2月23日(日)	8:00	ホテル出発	屏東県
	9:30	屏東県屏東県霧台郷神山部落訪問 屏東科技大学・陳美恵教授の案内で社区林業(金線蓮などの熱帯植物、養蜂)の現場を視察 原住民ルカイ族頭目の家で文化を学ぶ	
	夕方	魯凱百步蛇にて夕食(原住民料理) 【撒拉伯民宿泊】	
2月24日(月)	9:00	ホテル出発	屏東県
	10:00	林務局屏東管理处川永農場訪問 健康食品によるブランド商品化を学ぶ	
	14:30	ルカイ族青葉部落の壁画を協会理事長・ナンバオさんの案内で見学 台南市に移動	
	夕方	度小月擔在にて夕食(台南料理) 【日昇大飯店泊】	
2月25日(火)	8:30	ホテル出発	台南市
	9:45	成功大学学生と交流(昼食は大学で弁当を用意)	
	14:30	地元旅行社の案内で水仙宮市場、西門市場などを訪問し食の魅力を 探るほか、各種の道教寺院、神農街の伝統的な町並みを散策	
	17:00	北門の塩田見学	
	19:00	Chef Table Food & Wineにて夕食 夜市視察 【日昇大飯店泊】	
2月26日(水)	8:20	ホテル出発	台北市
	9:30	安平古堡(ゼーランディア城)視察 台北に向け移動	
	16:00	新竹県・北埔郷の茶園訪問(山口大学・陳禮俊教授親戚経営) 有機栽培の現場で客家の擂茶(れいちゃ)体験	
	19:00	金品茶楼にて夕食(小籠包) 【六福客棧泊】	
2月27日(木)	9:00	台北市内視察	台北市
	10:00	忠烈祠で衛兵交替式視察 西門の西本願寺視察後、周辺散策	
	12:00	洪師傅牛肉にて昼食(牛肉麵) 専用車にて桃園国際空港へ移動	
	17:25	中華航空 CI158 桃園国際空港発	
	20:50	関西空港到着、空港にて解散	

村井 俊介

(文学部 歴史学科 4年次生)

私は今後の仕事や人生において糧になる学びをこのツアーで得られた。

一つは台湾における自然を活用した取り組みである。日本と同様に多くの森林を有する台湾でも、地域の環境保全や新たな産業の創出、山岳地帯の人口減少が課題となっており、解決に向けた様々な取り組みが行われている。特に興味深かったのは森林資源の活用方法である。それは「林下経済」と名付けられ、平地では育てにくい作物を森林でしかできない栽培方法で育て、販売するというものである。山間部の活性化は私の地元・奈良でも実施されており、似た課題を抱えている。環境を守りつつ活用するための新たな方法を学ぶことができた。

もう一つは国立成功大学の学生との交流である。日本について深い関心を持っており様々なことを英語で質問されたが、うまく答えられずスムーズな会話とはならなかった。この経験を忘れずに語学力の向上に励みたい。



新型コロナウイルスの予防。症状があれば申告を促す看板。テレビでも繰り返し同様のCMが流れていた

岩畑 広輝

(社会学部 社会学科 2年次生)

私は2月22日から2月27日に台湾で行われた、NGO主催の「台湾の自然・文化体験エコツアー～森林、原住民、食から学ぶ～」に参加した。参加の目的としては、より多くの異文化に直接触れ自分自身の視野を広げることであった。高雄から始まり、原住民の住む霧台や台南などを巡り、台北まで行くという台湾を約半周するツアーであった。各地域で景観を始めとした、文化や現地の植物、食などの違いがありそれらを肌で感じる事ができた。特に直に感じる事ができたのは食だった。台湾の南に位置する高

雄からの出発だったのだが、南部の食事は「甘い」「濃い」という印象が強く個人的には非常に苦手な味だったが、文化として受け入れることができた。食を「文化」として体験でき、自分の未知な世界を知るという点で目的を果たすことができ、非常に有意義な経験となった。



アミ部落の共同墓地。日本が統治する前は、自分の家の下に祖先の遺骨を埋めていた。日本の統治以降、外に墓地を作るようになったそう

中原 紘子

(農学部 資源生物科学科 2年次生)

このプログラムは、台湾の豊かな自然を活かした産業への取り組みや台湾の歴史や文化に触れる機会が多く設けられており、観光だけでは得られない経験をたくさんすることができた。その中でも印象に残っていることは、森林や生態系の環境を維持しながら自然を活かした「林下経済」である。これは山村地域で行われている取り組みで、住民だけでなく、政府や大学などが連携して行っている。実際に養蜂や薬用植物の栽培の様子を見学し、この地域の森林を活かした独自の産業であると感じられた。こうした産業を発展させることで、地域独自のブランド商品の開発や地域の活性化につながると考えられる。このプログラムを通して、森林や生態系と共生し、産業を行う取り組みに興味を持った。また、機会があれば、このような取り組みや活動に参加してみたいと思った。



神山部落にあるレストランでその地域の食材を用いた料理をいただいた

三戸 呂 優美**(文学部 英語英米文学科 1年次生)**

私はこの春、台湾のスタディツアーに参加した。このプログラムでは5泊6日で台湾の色々な場所に行くことができた。元々台湾は行ってみたい国だったので、このツアーに参加できてよかった。このツアーでは毎日たくさんのことを経験したが、一番心に残ったのは、成功大学の方々との交流である。私たちと同じ学生でありながら、その語学力にとっても驚いた。私達に日本語や英語でどんどん話しかけてくれ、英語も日本語もとても流暢に話していた。私も一生懸命英語で自分の考えていることを伝えようとしたが、自分の語学力の低さを痛感することになった。

今回のツアーは私にとってとても充実した1週間だった。まず普通の旅行では行けないところに行け、見ることのできない場所に行くことができ、とても貴重な経験ができた。成功大学の方々と接して、私もいろんな国の言葉を話し

たい、語学力を身に着けたいと思った。その為に学生の間でできること、学べることを考えていきたい。



塩田に行ったときに撮った写真。天気も良くてとてもきれいな写真が撮れた

事業名	体験学習プログラム報告会
日時	2019年度 夏季：2019年10月21日（月）18時00分～18時45分（瀬田） 2019年10月25日（金）12時30分～13時00分（深草） 2019年度 春季：新型コロナウイルスの影響により中止
場所	2019年度 夏季：深草キャンパス 和顔館 アクティビティホール 瀬田キャンパス 6号館プレゼンテーション室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	2019年度夏季：30名

1. 経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かそうとしているのかを発表する機会として、プログラムの一環で報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらえるように、深草、瀬田2つのキャンパスで誰でも報告を聴けるオープン形式で実施しました。

2. 概要

参加した学生が、それぞれの体験を通じて学んだことを報告しました。プログラムに参加した学生以外に、参加学生の保護者、海外プログラムに関心を持つ学生、一般の方にも参加いただきました。

3. コーディネーター所感

プログラムに参加した学生は、それぞれの体験を通じて様々なことを感じ、そこから気づきや学びを得ています。プログラム終了後に行う事後学習会では、各々の思いを共有し、この報告会に向けた準備をすすめ、聞いて下さる方に伝わるようにまとめる作業を行います。学び、感じたことを仲間と共有し、さらに、報告会に来ていただいた方に伝わるように写真や、音楽、動画を使って短い時間にまとめています。ぜひ、多くの方に来ていただきたい報告会です。

	体験先・参加者	テーマ
19年度 夏季	タイ王国 参加者：3名	インド洋大津波からの復興タイ験

〈報告者：上手 礼子
（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

